

## 共進化実現プログラムとは

文科省からの提案(政策ニーズ)と、政策研究者のテーマ(政策シーズ)をマッチングさせ政策課題を設定し、協働でプロジェクトを実施（1～複数年）

## 期待される効果

行政官と研究者が協働してEBPMを実践することにより

- ・ 政策ニーズに適合した具体的な研究成果が得られる（行政）
- ・ お互いの立ち位置や価値観の異なる相手とのエビデンス形成に関する協働作業により、行政官のスキル・リテラシーが飛躍的に向上する（行政）
- ・ 政策形成に直接関わることにより、行政のダイナミズムへのリテラシーが産まれる（研究者）
- ・ 相互の意思疎通を通じた政策形成プロセスは、これまでにないチャレンジ（双方） など

## 第1フェーズ(R1～R2)との主な違い

(課題設定) ポストコロナ時代の研究推進、EBPM推進の具体化につながる研究など重点推進領域を設定

(行政側) 官房等のアレンジによる提案（官房政策課との連携）など、省内における各種EBPMの取組とも連携、政策リエゾンの積極関与

(研究側) 拠点大学に加え、NISTEP、RISTEXの研究者の参画を想定、CRDSフェローによるオブザーバー参画

RISTEXの公募により、国内の他大学や研究機関との連携による政策研究も広く対象

(運営管理) ステージゲート方式の導入

